

企画部会における主な意見

1	計画期間について	p. 1
2	将来像(長期目標)について	p. 1
3	現行計画との関係について	p. 3
4	構成について	p. 3
5	点検・評価について	p. 4
6	道民の意見を聞く機会について	p. 4
7	SDGsについて	p. 4
8	その他	p. 5

1 計画期間について

番号	意見の内容	議事録
①	SDGsのターゲットイヤーが2030年であることから、環境基本計画の計画期間は、2030年を挟むように設定してはどうか。	第1回 p. 9
②	環境問題には一定程度の期間を想定して取り組む必要がある他、例えば温暖化では年変動があり、適切な検証には10年を要するなど、正しく検証するためには準備期間が必要だというポジティブな書き方があった方がよい。	第2回 p. 4

2 将来像(長期目標)について

番号	意見の内容	議事録
①	分野によって目標とする年が異なるため、長期目標(見据える時期)の他に、中期目標を設けてはどうか。	第1回 p. 15
②	計画期間と将来像(長期目標)の見据える時期は、分野ごとに異なってもよいのではないか。	第1回 p. 16
③	環境基本計画の中で、地球温暖化が占める位置は大きく、それとの整合を図るべきではないか。	第1回 p. 19
④	個別計画やその目標はかなりの議論を経て策定したものであり、具体的、定量的な目標を個別計画に委ねるとの事務局の方向性は、積極的に書いてよい。	第2回 p. 4
⑤	「低炭素」と「脱炭素」は概念が異なることを認識すべき。低炭素で今世紀後半を目指すのでは、日本も北海道も世界から取り残されることになる。	第2回 p. 16
⑥	二酸化炭素を減らすという観点では、国の動きを待つのではなく、ネガティブ・エミッション技術など新しいことに取り組み、先に進んでほしいというのが道民の思いではないか。	第2回 p. 17

⑦	国の計画と乖離がないかどうかについては、あまり縛られなくてよいのではないか。北海道はの上を行くのだという気概を持たなければ、農業自給率、希少種、生物多様性などいろいろな面で、国と同じ考え方でうまくいかない。国の計画を参考にできるところはする必要があるが、それにこだわらず、ぜひ北海道ならではの環境の姿を目指していきたい。	第2回 p. 17
⑧	最終到達点として「脱炭素社会」を掲げ、野心的に今世紀後半のできるだけ早期に実現していく、とする国の考え方より後退してはならない。	第2回 p. 18
⑨	国の計画を気にし過ぎている。せつかく改定するので、国内を引っ張っていくような計画にした方がよい。	第2回 p. 18
⑩	現行計画の将来像の視点として、将来はもうこのような状況になっている、ということを目指さないと、いつまでたっても「進めます」と言っているのでは遅いのではないか。全ての分野において、将来像はこうあるべきだというものをもう少し明確に打ち出してもよいのではないか。	第2回 p. 18
⑪	現行計画 p. 9 「将来像のイメージ」のようなイメージは大事。	第2回 p. 18
⑫	将来像に係る検討が、道内からの目線でしかないと思うが、すばらしい自然環境を外から見にきたい人などの視点も入れることにより、観光や農業などに広がりが出る。「自然と共生」という表現には、「世界がうらやむ自然との共生」など、修飾する文言も必要。	第2回 p. 18
⑬	「環境・経済・社会の統合的向上」の視点はよいが、そのままではわかりにくい。例えば、脱炭素社会の実現のためには、再生可能エネルギーの推進が重要だが、それが進みすぎると、風車とバードストライクの関係など、どこかが切り捨てられる場合があることがわかりやすい書き方にした方がよい。	第2回 p. 19
⑭	営農型の太陽光発電など新技術がどんどん出ているので、そういった新技術を積極的に取り入れていくという意気込みも必要ではないか。	第2回 p. 19
⑮	将来像のイメージを道民と共有することは重要で、将来像の題名としてキャッチーでしっくり来るようなものがあると、道民にもなじみやすいのではないか。	第2回 p. 20
⑯	地域循環共生圏については、中心になって取り組む人の有無や成立する地域など、北海道にこのまま当てはめられるのかどうかをよく考えなければ、仕掛ける人も実際に動く人もいないという状態になりかねない。地域循環共生圏のイメージは、場所を想定して提案した方がよい。	第2回 p. 20
⑰	地域循環共生圏については、ぜひ北海道ならではの考え方を取り入れた北海道バージョンとすべきであり、これからは、道内のみならず、北海道とアジアや世界との間でどう循環共生を図るかという視点、つまり、北海道は国を飛び越えて世界とつながっていることや、北海道の自然を目指して観光客が大勢来ているといった視点が盛り込まれるとよい。 その際、国際レベルでの合意や枠組から、北海道は国際レベルの環境を目指す、と説明するとよいが、国際レベルでの合意や枠組としては、2030 アジェン	第2回 p. 21

	ダやパリ協定の他、9月に中国で開催されるCOP15（生物多様性条約第15回締結国会議）での考え方も参考としてほしい。	
⑱	過去に、農水省のプロジェクトで、バイオマスタウンというものがあった。北海道の廃棄物では、バイオマスが特徴的。成功事例とそうでない事例を見るのもよい。	第2回 p. 22

3 個別計画との関係について

番号	意見の内容	議事録
①	(環境基本計画より先に策定・改定する個別計画もあることから) 個別計画がある分野については、個別計画に沿って目標に向かって推進するといった程度にとどめてはどうか。	第1回 p. 18
②	環境基本計画は、長期的な本当にあるべき姿に向けての方向性を示し、個別の計画策定の際に、最大限考慮していくべきものではないか。	第1回 p. 24
③	現行計画 p. 14 に、「環境政策については多数の関連計画等が策定されており、施策の推進に当たっては、これらの関連計画等との調和を図ることとします。」とあるが、どちらが調和するのか曖昧。	第1回 p. 24

4 構成について

番号	意見の内容	議事録
①	現行計画において、「分野別の施策の展開」の各分野にある「めざす姿(あるべき姿のイメージ)」が見据える時期は、計画全体の将来像(長期目標)と同じなのか、分野ごとに設定しているのかわかりにくい。	第2回 p. 7
②	第2章冒頭の「環境・経済・社会の統合的向上に向けた考え方」の記載箇所は、SDGsとの関係に係る記載もあると思われ、内容次第では第1章の将来像の前とすることも考えられる。	第2回 p. 11
③	正確な情報に基づいて現状分析を行うことは重要であり、環境基本計画の中で、必要な調査を行って現状を把握するという視点も入れてはどうか。	第2回 p. 11
④	環境に関するデータの収集に関して、計画の中に記載があってもよいのではないか。	第2回 p. 11
⑤	「分野横断の取組」として、経済システムのグリーン化、人づくりの他、調査研究の推進のようなものもあると思うが、分野横断というより、計画推進に必要な環境整備のような位置づけであると思われ、分野横断といって広く横串にするよりは、個別計画や個別目標の達成に必要な環境整備とする方がわかりやすいのではないか。	第2回 p. 12

⑥	「分野横断の取組」は、個別計画を俯瞰した上での課題提起をしていく内容になると思われるため、順序を「分野別施策の展開」の後として、個別の課題を認識した上で、それらと連携して分野横断の取組が必要と提案する流れがよいのではないか。	第2回 p. 12
---	--	--------------

5 点検・評価について

番号	意見の内容	議事録
①	環境基本計画の点検・評価に、個別計画の目標を活用する場合、個別計画の評価の転記ではなく、環境基本計画の点検として、分野ごとに全体的な評価が必要ではないか。	第2回 p. 7
②	個別計画の点検が遅れている分野、個別計画があった方がいいのに策定されていない分野については、誰が点検するのか。将来像に向けて、不足するところがないかとの議論はしなくていいのか。	第2回 p. 8

6 道民の意見を聞く機会について

番号	意見の内容	議事録
①	道や環境審議会では気づかない視点を汲み取る場として、計画のたたき台をじっくりと道民と一緒に読む機会や意見を交換する機会を何カ所かで開催することを前向きに検討してほしい。そのような場には、中高校生など学生にも声をかけるのが重要。	第2回 p. 8
②	将来像は、道民の意見が取り入れやすいところ。将来像を共有するため、道民参加の機会を設ければ、次期計画は受け入れられやすいものとなるのではないか。	第2回 p. 19

7 SDGsについて

番号	意見の内容	議事録
①	SDGsの国際的なインデックスと、道の個別計画が定めるインデックスは異なるため、整理が必要ではないか。	第1回 p. 16
②	SDGsを環境基本計画の中に入れ込んでいく上では、こちらが立てばあちらが立たず、というようなトレードオフの関係ではなく、調和や相乗効果とすることが基本ではないか。	第1回 p. 24
③	SDGsの最も重要な考え方は、誰も取り残さないという包摂性とバックキャストの考え方である。包摂性に関しては、環境分野の施策を進める上で、全ての人、全ての生物に対してしっかり考慮することだと思う。	第2回 p. 5

	また、長期目標の達成のために、バックキャストिंगして、この10年でどこまで行くべきかという筋道がほしい。	
--	---	--

8 その他

番号	意見の内容	議事録
①	「社会・経済・環境の状況」に係る説明において、自然環境分野の資料が薄い。特に、生物多様性分野の取組をどのようにしていくかは、北海道の一つの大きな特徴である。	第1回 p. 11
②	個別計画があるから環境基本計画を作るのではなく、環境基本計画に個別計画が紐付けられているのであるから、個別計画がない事項について、ないことを環境基本計画の中に入れておく視点も大事。	第1回 p. 21
③	NPO等の団体が高齢化しており、数も少なくなっている。環境基本計画を作っても、誰が実行するのかという部分が抜け落ちるのではないか。	第1回 p. 24
④	国・道・市町村との法律上の役割分担の点から、市民活動自体がやりにくい形になっていることについても話をしていく必要があるのではないか。	第1回 p. 25
⑤	土地利用、観光、緑地、景観など、横断的に展開すべき施策については、他部局の施策との連携を考えた上での環境基本計画への書き方もあるのではないか。	第1回 p. 27
⑥	環境基本計画の実効性を確保するためには、環境部局が所管している計画だけを動かしていれば足りるということではない。本計画と、個別計画や多数の関連計画がどう連携していくのかをどこかに盛り込んでほしい。	第2回 p. 5
⑦	道のような大きな組織では、他部局との調整が大変と思われるが、環境は北海道にとって重要なところなので、調整しすぎて何を書いているかわからないということにならないように、どこかで尖ったところがあってもいいのではないか。	第2回 p. 9
⑧	4つの個別計画のうち、環境教育は、結果が出るのにも時間がかかり、最も目標を立てにくい分野ではあるが、人材育成は重要であり、SDGsと絡めるなど、道民から見て前に進んでいる感じが見えるような仕掛けができるとよいのではないか。	第2回 p. 22